

自動詞使役の助詞についての一考察

著者	渡嘉敷 恭子
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	16
ページ	47-60
発行年	2006
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005888/

自動詞使役の助詞についての一考察

渡嘉敷 恭子

要旨

多くの日本語教師が文法書やテキストの文法説明に違和感を持った経験があるのではないだろうか。実際に日本語教育の文法説明と日本語の母語話者の認識との間にずれがあることも多い。本稿ではその一例として自動詞使役の被使役者を示す助詞の選択に焦点を当てた。⁽¹⁾ 文法書、テキストでの文法説明について調査してみると、「を」をとるとしか説明していないもの、「を」または「に」をとり、その意味の違いについて説明がないもの、自動詞使役では「を」または「に」をとり、「を」の場合は被使役者の意思に関わらず被使役者がその行為を行い、「に」の場合は被使役者の意思が尊重されて行為が行われるという解釈のものと、大きく分けて三種類の説明があることがわかった。日本語の母語話者を対象に行ったアンケート調査の結果、「に」と「を」の持つ「強制」「許容」のニュアンスの違いについて認識し、使い分けしている日本語母語話者は少なく、助詞が重複しないように感覚的に助詞を選択していることがわかった。

【キーワード】 自動詞使役、文法、用法、教科書分析、文法性判断

1. はじめに

使役文に関わらず、多くの日本語教師がその内容を文法書やテキストの解説をそのまま学習者に教えるべきかどうか迷ったことがあるのではないか。日本語能力試験 3 級レベルの文法項目である使役文は初級の後半レベルの学習項目として導入・練習されることが一般的であるが、使用している文法書やテキストの説明の内容に違和感を持ったことはないだろうか。米澤 (1992, 123) も「日本語のクラスで使役文を扱う場合、学習者の負担を何とか軽くしたいと思うことはよくある」と述べているように、できるだけ簡潔で分かりやすい説明を行うほうがその文型の定着に繋がると思われる。特に、自動詞使役の助詞に関しては、文法書やテキストによっては定義が異なることから、どの説明を採用すればいいのか、また、説明されているままだを教えたほうがいいのか迷い、その効果的な方法を見出せていないのではないだろうか。

本稿では、自動詞使役文の助詞に焦点を当てて考察する。まず、日本語教師、また日本語学習者向けの文法書の中で自動詞使役文における助詞の選択がどのように定義されているか、また代表的な初級日本語教科書でどう説明されているか調べ、日本語母語話者の認識とも比較しながら、考察してみる。

2. 使役の助詞に関する一般的な定義

ここでは教師向けと学習者向けに書かれた文法参考書を6種類取り上げ、それぞれの使役の用法・定義を、助詞に関する解説を中心に比較してみる。今回取り上げたのは次の通りで、簡単に表にまとめてみた（発行年順）。

書名（発行年・使用言語）	自動詞使役文の助詞に関する説明
日本語基本文法辞典 （1986・英語）	かなり詳しく書かれている。 When the main verb is an intransitive verb, the causee is marked by either <i>o</i> or <i>ni</i> When <i>ni</i> is used the causee has taken an action intentionally. <i>O</i> , on the other hand, can be used regardless of the causee's volition, ...
『はじめての人の日本語文法』（1991・日本語）	簡潔な説明。 被使役者を示す助詞は、もとの文に「～を」があれば「～に」になり、もとの文に「～を」がなければ「～を」になる。
『独りで学べる日本語文法』（1996・日本語）	かなり詳しい説明。 自動詞は「に」をとるものと「を」をとるものがある。 「に」をとるもの ① 移動動詞（「交差点を渡る」） ② 「答える」、「しゃべる」、「発言する」など人に対しての動作 「を」をとるもの ⁽²⁾ ① もとの文で「に」が使われているもの 弟を東京に来させる 生徒を廊下に立たせる ② 感情を表現するもの ③ 主体が非情物

	④ 結果の招来（「子どもを死なせる」） どちらも使えるときは「に」の場合には、相手の意向にそ って、その行為をさせるという意味で、「を」の場合は強 制的に行かせるという意味である。
『どんなときどう使う日本 語表現文型 200』（2000・日 本語、英語と中国語の対訳 付き）	簡潔な説明。 自動詞のとき、Agent of action（被使役者）の助詞は「を」 を使用する。しかし、「道の内側を歩く」など「を」をと る場合は例外的に「に」をとる。
『日本語基本文型辞典』 （2000・英語）	助詞に関する記述がほとんどない。 The noun showing who is being forced is followed by the particle <i>ni/o</i> . とあるが自動詞の例文は 先生は学生を帰させます。 私は毎朝犬を散歩させます。 と「を」の例文だけ提示し てある。
『初級日本語文法と教え方 のポイント』（2005・日本語）	簡潔な説明。 自動詞の場合は「を」をとる。

誰を対象にして書かれているかによって解説の内容、方法は様々であった。『日本語基本文型辞典』、『どんなときどう使う日本語表現文型 200』、『はじめての人の日本語文法』、『初級日本語文法と教え方のポイント』の四冊は、助詞に関する解説は必要最低限で簡潔にまとめられていた。『はじめての人の日本語文法』、『どんなときどう使う日本語表現文型 200』、『初級日本語文法と教え方のポイント』は「を」が重なる場合（例「道の内側を歩く」など）を除いて、自動詞の使役文で被使役者は「を」をとると簡単にわかりやすく説明している。その中の『はじめての人の日本語文法』では、その後の質問コーナーで「もとの文に「～を」がない動詞でも、「遊ぶ」のように意思的な行為を表す動詞であれば、被使役者をあらわすのに「に」が使える場合もある。このとき、「を」（強制的）「に」（許容）というニュアンスがつきまとうようだが、感じ方には個人差があると指摘している。また、もとの文に「～に」がある場合は「子供たちをいすに座らせる」のほうが普通と説明している。『日本語基本文型辞典（茅野）』は、自動詞、他動詞の区別はしていたが、助詞に関する説明はどちらも‘The noun showing who is being forced is followed by the particle *ni* or *o*.’だった。この説明だと他動詞使役文でも「を」を取ることができるということになってしまう。

この中で発行年が最も古い『日本語基本文法辞典（牧野）』は助詞の選択に関してもかなり詳しく書いてあり、日本語教師の間で最も一般的とされてきた解釈かもしれない。

動詞が他動詞の場合は被使役者を示す助詞は「に」である。自動詞の場合の記述は、‘When the main verb is an intransitive verb, the causee is marked by either *o* or *ni*. The choice between the two particles depends on the following general rule. When *ni* is used, the causee has taken an action *intentionally*.’ とある。すなわち、自動詞の場合は「に」または「を」をとる。「に」の場合は、被使役者が意思を持ってその行為をしたときである。

『独りで学べる日本語文法』も助詞の選択について詳しい記述があったが、『日本語基本文法辞典』とは内容がかなり異なっている。自動詞の使役文で「に」をとるもの、「を」をとるもの、どちらもとるものの3種類に分類している。特徴的なのは「を」をとるものの中に『もとの文で「に」が使われているもの』を挙げているところである。「生徒を廊下に立たせる」「弟を東京に来させる」の2例を挙げている。その他、「を」をとるものに「感情を表現する動詞（泣かせる）」「主体が非情物の場合（腐らせる）」「結果の招来（死なせる）」を挙げている。しかし、どちらもとるものでは、「に」の場合は被使役者の意思が関係し、「を」の場合は、被使役者の意思には関係ないと説明している。この解説は『日本語基本文法辞典（牧野）』に類似している。

3. 日本語教科書での説明

初級テキストにおいて使役文の扱いについての比較は中川（1995）や高橋、白川（2005）が行っているが、本稿では自動詞使役における被使役者の助詞の選択についての説明に絞って比較した。⁽³⁾

今回、比較したテキストは以下の10種である。発行年順に並べ、簡単にまとめた。「を」／「に」の使用を区別し、意味の違いについても言及しているものは○、区別しているが意味の違いについては書かれていないものは△、「を」だけに限定しているものは×で示した。

テキスト(発行年)	助詞に関する記述
<i>Japanese For Everyone</i> (1990)	△ (person causing)が (person caused)に (direct object)を verb (person causing)が (person caused)に/を verb と説明しているが自動詞の場合の「に・を」の使い分けについては言及していない。
コミュニケーションのための 日本語入門 (1992(絶版))	○ 例文に「両親が子供を・に日本人学校へ行かせる。」

	を挙げ、「を」の場合は両親の意思で子供の意思に関係なく（‘make’）, 「に」の場合は子供の意思を汲み取っている（‘allow’）という解釈。
<i>Situational Functional Japanese</i> (1994)	× 自動詞（一を verb）、他動詞（+を verb）の場合の区別はあるが、自動詞（一を verb）の時は行為者（被使役者）には「を」が付くとしか書かれていない。「に」については言及していない。
新日本語の基礎 (1994)	× 他動詞の場合は the subject of an action（被使役者）+ 「に」（「～を」が実際に表面化していなくても）で、自動詞の場合は「を」である。自動詞の場合の「に」については言及されていない。
<i>TOTAL JAPANESE</i> (1994)	× 自動詞のときは行為者（被使役者）には「を」が付く。「先生は子供たちに道の右側を歩かせました」などは例外。（『みんなの日本語』と似ている説明）
<i>Yookoso!</i> (1994)	○ 自動詞の場合「を」「に」どちらも可能だが、「を」のときは coercive causative で無理やりというニュアンスがある。一方「に」のときはしたがる被使役者にすることを許可したという意味がある。他動詞の場合は「を」しか取れないので ambiguous だという説明。
I C Uの日本語 (1997)	○ 自動詞のときは N2（被使役者）は「に」も「を」もとれる。「に」をとったときは ‘let’ の意味になる。例文として「母は妹に・を買い物に行かせます。」を挙げ、「妹に」には ‘let/make’、 「妹を」には ‘make’ の訳を付けている。
みんなの日本語 (1998)	× 自動詞なら the subject of an action（被使役者）には「を」が付き、他動詞のときは「に」が付く。例文も「私は子どもに道の右側を歩かせます」は例外として

	提示しているが、他には言及していない。
げんき II (1999)	× 本文では行為者（被使役者）は「に」でマークされるとしている。しかし、その脚注で反射動詞 reflex（泣く、笑うなど）の場合と「を」を取らない動詞には「を」を使うと説明している。「を」を取らない動詞の場合の「に」の使用に関しては言及していない。
<i>A Course in Modern Japanese</i> (2 nd ed.) (2002)	△ <i>Japanese For Everyone</i> と同様、自動詞の場合はどちらも可能と説明し、例文には「弟に買い物に行かせます。」「弟を買い物に行かせます。」「I will make my younger brother go shopping.」の訳で並列し、意味の違いには言及していない。

Situational Functional Japanese Volume 3: Notes second edition、『みんなの日本語 初級 II 翻訳・文法解説英語版』、『新日本語の基礎 II 文法解説書 英語版』、*TOTAL JAPANESE - Grammar and Conversation Notes*、『げんき II』の五冊は直接目的語をとる動詞の文では被使役者は「に」をとり、直接目的語をとらない動詞の文では「を」をとると説明している。

Japanese For Everyone と *A Course in Modern Japanese, Revised Edition, Volume 2* では使役文の意味は状況によって ‘have’ ‘make’ ‘let’ ‘get’ になり、自動詞使役では被使役者は「を」または「に」をとるとしているが、意味の違いについての説明はない。

『コミュニケーションのための日本語入門』は直接目的語を取らない動詞の文で、被使役者は「に」または「を」をとると解説している。その違いについては、「を」をとる場合は使役者自身の意思が動作に結びついているという解釈で、「に」の場合は使役者が被使役者の意思を尊重しているという、『日本語基本文法辞典（牧野）』に類似する解釈である。例文には「両親が子供を／に日本人学校へ行かせる」を挙げている。従って、意思を持たない花が被使役者の場合、「私はきれいな花に咲かせました」という文は ‘illogical’ だと説明している。

『ICUの日本語』も同様の説明で、自動詞使役は「に」も「を」も可能で、「を」をとる場合は ‘make’ の意味になり、「に」をとる場合は ‘let’ か ‘make’ のどちらかの意味になる。どういう場合に ‘let’ でどういう場合に ‘make’ になるのかには言及していない。「母は妹に・を買い物に行かせます」では、「に」の場合は ‘let/make’ で、「を」の場合は ‘make’ のみの訳になっている。

*Yookoso! An Invitation to Contemporary Japanese.*の場合は、自動詞使役の場合、被使役者は「に」または「を」をとる。「を」の場合は‘coercive causative’と呼ばれ、被使役者に意思に反して動作を行わせるという解釈ができ、「に」の場合は被使役者の意思があり、その意思を尊重し、使役者がそうさせてあげるという解釈になる。「に」の場合の英訳は‘let/allowed’が使われている。また、他動詞使役の場合の解釈は‘make’か‘let’かは曖昧なので状況から判断する必要があると説明している。「山口さんはさとみさんにシチューを作らせた。」の訳には‘made or let’とどちらもつけているが、‘let’の意味では解釈しにくいのではないだろうか。

このように見てくると、自動詞使役での被使役者を示す助詞についての説明は大きく分けて3つのパターンがあることがわかる。

- I. 「を」をとるとしか説明していないもの。
- II. 「を」または「に」をとり、その意味の違いについては説明がないもの。
- III. 自動詞使役では「を」または「に」をとり、「を」の場合は被使役者の意思に関わらず被使役者がその行為を行い、「に」の場合は被使役者の意思が尊重されて行為が行われるという解釈のもの。

IIIに分類した教材の説明には母語話者として違和感を感じる。自動詞使役の場合、被使役者の意思の有無が関係し、発話者がそれを意識して、助詞を選択しているのだろうか。発話者と使役者が同一人物の場合で被使役者の利益を考えてそうさせる・そうさせたと言いたい場合、また、発話者がなんらかの形で自分ではない使役者が被使役者の意向にそってそうさせる・そうさせたと思っている場合は、口語レベルの発話では「～てあげる」と授受動詞をつけて表現するのではないだろうか。中川（1995）も使役者が被使役者の希望をかなえて動作を行うことを「許可」する場合、「～てやる」「～くれる」「～てもらう」の授受補助動詞をつけると、許可の意味が明らかになると述べている。また、庵（2001）も被使役者がしようとしている（または実際にしている）のを使役者が妨げないことによってさせる（し続けさせる）場合の使役表現は授受補助動詞や「～ておく」「～みる」を伴うことが多いとしている。実際の口語レベルの日本語ではこれらの補助動詞をつけるほうが一般的ではないだろうか。例えば、会社で出張に行く人を決める場合、上司が部下である田中を行かせたいとき、「今回は田中に行かせましょうか」という表現を使うことがある。その場合、使役者が被使役者である田中の意向を汲み取っているという解釈はむずかしい。また、自動詞の場合は「に」と「を」の選択があるので、発話者は「意思の有無」について、文にそのニュアンスを含めることができるが、他動詞の場合はその選択はなく、曖昧で文脈の流れから判断するということになる。そ

の点にも矛盾を感じる。Iに分類した教材のように、「を」をとり得る動詞の場合は被使役者には「に」が付き、「を」をとり得ない動詞、つまり自動詞の使役文の場合は被使役者には「を」が付くと簡単に説明すればいいと考える。

4. 日本語母語話者を対象にしたアンケート調査

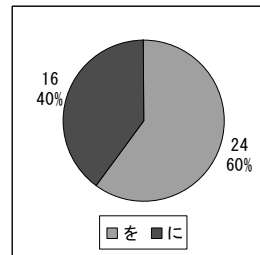
そこで 2005-6 年度の日本語教育法Ⅱの学生 40 名にアンケート調査を行った（本稿最終ページ「資料1」参照）。まず、「次の（ ）の中を助詞で埋めてください。あまり考えないで直感的に答えてください。」という指示文の後に（ ）の中に助詞を入れてもらった。意味が取りやすいように英語訳を付けた。

1. The teacher let the student go to the restroom.

先生は学生（ ）トイレに行かせてあげました。

「を」を入れた被験者 24 人（60%）

「に」を入れた被験者 16 人（40%）



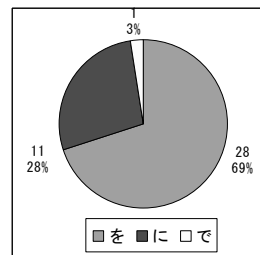
2. The mother let the child swim in the pool.

母親は子供（ ）プールで泳がせてあげました。

「を」 28 人（70%）

「に」 11 人（27.5%）

「で」 1 人（2.5%）⁽⁴⁾

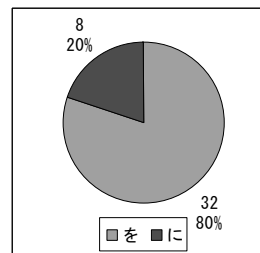


3. The father makes the child run every day.

父親は子供（ ）毎日走らせます。

「を」 32 人（80%）

「に」 8 人（20%）

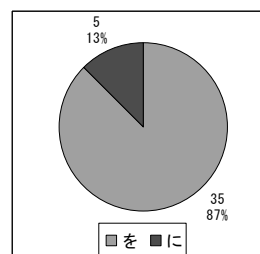


4. The mother made the child go to the cram school.

母親は子供（ ）塾に行かせました。

「を」 35 人（87.5%）

「に」 5 人（12.5%）

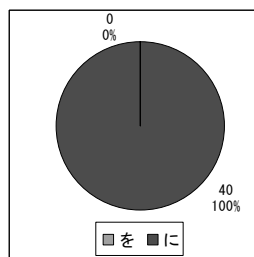


5. The teacher makes the students do homework.

先生は学生（ ）宿題をさせます。

「を」 0 人 (0%)

「に」 40 人 (100%)



母語話者は自動詞使役文の場合、かなり高い確率で被使役者を「を」でマークすること、また、3と4のように‘make’という訳でも「に」を使用する母語話者がいるということがわかった。特に、4の文のように、文中に「場所+に」のように「に」の使用がある場合、被使役者を「を」でマークする被験者の割合が3の文より増えている。4には「塾に」が入っているので、「に」の重複を避けるために「を」を使った被験者の割合が高くなったと思われる。⁽⁵⁾ 『中級レベル わかって使える日本語 指導のポイント』(2004)は「助詞を選ぶ手がかりは、助詞の重複を避けるということであって、自動詞か他動詞かではない」としている。また、高橋、白川(2005, 29)は「動詞の自他の区別という負担をなくし、よりシンプルなルールで格助詞を選択できるということは教師にとっても貴重な指摘」だと述べている。しかし、動詞が他動詞である場合は、目的語が文中に表面化していなくても、被使役者に「を」を使用することができないので、「学生を勉強させます」のような間違っただけの文を作らないためにも、少なくともその動詞が「を」で示す目的語を取りうる動詞かどうかを判断する知識を持つ必要がある。

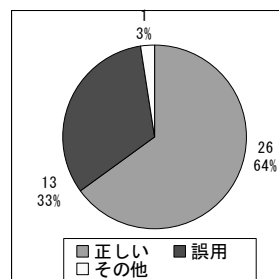
次に「次の文は正しい文ですか。(そうでないならどこが間違っていますか。)」という質問に簡単に答えてもらった。

親は子供に買い物に行かせた。

「正しい」と答えた被験者 26 人 (65%)

「間違っている」と答えた被験者 13 人 (32.5%)

その他 1 人 (2.5%)⁽⁶⁾



自動詞使役の被使役者に付く「に」の使用について約3分の1の母語話者が誤用だと判断している。理由も記入してもらったが、13人中12人が「～に～にと続くから」と答えた。前の質問でも「に」の重複を避けて「を」を使った被験者が多かったのと同様、一文中に同じ助詞が重複することに違和感を持つ母語話者がいることがわかった。⁽⁷⁾ 母

語話者は「被使役者+を」と「被使役者+に」の間に存在するニュアンスの違いよりも、単純に助詞の重複という理由で直感的に助詞を選択しているようだ。

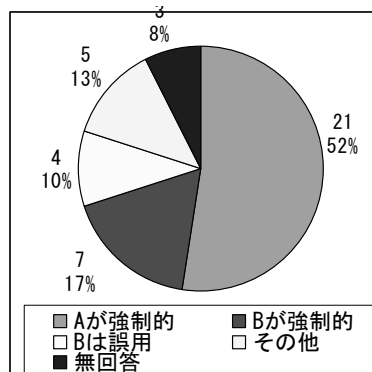
最後に下の二文について「次の二文はどのような意味の違いがあると思いますか。」という質問をした。

- A. 親は子供を座らせました。
- B. 親は子供に座らせました。

「Aのほうが強制的」と答えたのは21人（52.5%）で「Bのほうが強制的」と答えたのが7人（14%）だった。その他で目立った意見は「Bは言わない（誤用）」という答えが4人（10%）、無回答が3人（7.5%）だった。

その他少数意見では

- 1. Aは手足を取って、Bは言葉で指示している。
- 2. Aは命令した。Bは何かを子供の上に座らせた。
- 3. 子供に第三者をとというニュアンス。
- 4. Bは多くの中から子供を選んでという意味。
- 5. Bは客観的な視点。



というのがあった。2と3はそのような意味でしか捉えられないということは「Bは誤用」とした被験者の中に入れられるだろう。

『はじめての人の日本語文法（野田 1991）』も指摘しているように、「強制」と「許容」のニュアンスの感じ方は個人差があるようだ。母語話者の中でも被使役者を示す助詞の違いに伴う文法性判断にはかなり違いがあり、また話者自身の判断も揺れているようである。もし同じアンケートを同じ被験者に行ったとしても、同じ結果が得られるかはわからない。このような文法を日本語学習者に教える場合は、できるだけわかりやすい形で提示し、説明するほうが学習者の文型定着に繋がるのではないだろうか。動詞が目的語を取る動詞場合、目的語が表面化していなくても被使役者には「に」を用い、自動詞使役の場合は「に」でも「を」でも可能ではあるが、助詞の重複を避けたほうが自然だという説明が最も母語話者の認識とも矛盾がなく、簡潔な解釈だと言えるのではないだろうか。

5. まとめと今後の課題

以上、本稿ではまず文法参考書や代表的な初級日本語教科書で自動詞使役の被使役者

の助詞についてどう説明されているかを比較し、次に日本語母語話者の認識を調査し、その文法性判断の個人差や曖昧さについて考察した。文法参考書や教科書の定義では自動詞使役の被使役者の助詞は「を」または「に」が使われ、「に」の場合は使役者が被使役者の意思に従っているという解釈をしているものがある。しかし、それは母語話者の認識と共通しているわけではないということがわかった。母語話者の助詞の選択は単に助詞の重複を避けるというようなもっと感覚的なもので、「容認」「許容」のようなニュアンスの違いにはほとんどこだわっていないようだ。自動詞使役における被使役者には「に」または「を」を付けることができるが、「場所+に」のような名詞節が文中にある場合は助詞の重複を避けて助詞を選択するよう指導するべきだろう。杉村（2002）も指摘する通り、日本語教師は言語の規則は「習慣の産物」という立場で取り組むことが必要ではないか。日本語は多様化し、また日々変化している。使用している教科書の文法説明や文法性判断だけに頼ることなく、教師自らが実際に話されている日本語に耳を傾け、柔軟に対応していくべきだろう。

今回、日本語母語話者にアンケートを行ってみたが、簡易なものであり、データの数が不十分であったこと、また被験者の年齢や性別や出身地に偏りがあったことなど、十分であったとは言えない。今後更なる調査、研究が必要とされる。

注

- (1) させる人 (the causer)、させられる人 (the causee) についてはいろいろな用語があるが、本稿ではそれぞれ「使役者」、「被使役者」という用語を採用した。
- (2) 「を」をとる使役文は他動詞と意味の上から非常に近いところにあり、「泣かせる」など「に」を取らないものは他動詞だとする考えもあると説明している。
- (3) 中川はその論文の中で、10種類のテキストの中における「使役」「使役+授受」「使役受身」の提出位置について比較している。また、高橋、白川（2005）は5種類のテキスト「使役」を「受身」と比較しながら、「強制」「許容」「原因・誘発」「使役受身」「授受」に分けて、提出課を比較し、「強制」と「許容」はすべてのテキストが扱っていて、「原因・誘発」「使役受身」「授受」に関しては扱いに差があることを指摘している。
- (4) 「で」の選択は文の読み間違えで生じた誤用だと考えられる。
- (5) もし「塾に」ではなく、「塾へ」だった場合は、どのような結果が出るか次回調査したいと考えている。
- (6) 一名はどちらにもチェックせず、理由のところに「違和感を感じるが誤用ではない」と記入していた。
- (7) 「親は子供に買い物へ行かせた」の場合はどのような結果が出るか次回調査してみたい。

比較文献

- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 岡野喜美子（1994）*TOTAL JAPANESE-Grammar and Conversation Notes* 凡人社
- 海外技術者研修協会編（1994）『新日本語の基礎 II 文法解説書 英語版』スリーエーネットワーク
- 国際基督教大学編（1997）『I C Uの日本語』講談社インターナショナル
- スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語 初級 II 翻訳・文法解説英語版』スリーエーネットワーク
- 茅野直子（2000）『日本語基本文型辞典』講談社インターナショナル
- 筑波ランゲージグループ（1994）*Situational Functional Japanese Volume 3: Notes second edition*. 凡人社
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2000）『どんなときどう使う日本語表現文型 200』初・中級 アルク
- 名古屋大学日本語教育グループ編（2002）*A Course in Modern Japanese, Revised Edition, Volume 2* 名古屋大学出版会
- 野田尚史（1991）『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- 能登博義（1992）『コミュニケーションのための日本語入門』創拓社出版
- 坂野永理・大野裕・坂根庸子・品川恭子・渡嘉敷恭子（1999）『げんき II』ジャパントイムズ
- 東中川かほる（1996）『独りで学べる日本語文法』凡人社
- 牧野 成一・筒井通雄（1986）『日本語基本文法辞典』ジャパントイムズ
- Nagara, Susumu（1990）*Japanese For Everyone*, Gakken Co., Lid.
- Tohsaku, Yasu-Hiko（1994）*Yookoso! An Invitation to Contemporary Japanese*. McGraw-Hill, Inc.

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 中川良雄（1995）「日本語使役文の表現意図：日本語教科書における使役文の取り扱い」『日本語・日本文化研究』3号 京都外国語大学留学生別科, pp.1-14
- 杉村泰（2002）「コーパス調査による文法性判断の有効性－「～てならない」を例にして－」『日本語教育』114号 pp.60-69
- 高橋恵理子、白川博之（2006）「初級レベルにおける使役構文の扱いについて」『広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座』16号, pp.25-31

名古屋 YWCA 教材作成グループ (2004) 『中級レベル わかって使える日本語 指導のポイント』 スリーエーネットワーク

米澤みどり (1992) 「日本語母語話者による使役文の使われ方について」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 3 号, pp.123-145

資料 1

論文のデータを集めています。協力してください。

性別： 男・女

年齢： 歳

出身地： (一番長く住んでいる都道府県)

I. 次の () の中を助詞で埋めてください。あまり考えないで直感的に答えてください。

1. The teacher let the student go to the restroom.

先生は学生 () トイレに行かせてあげました。

2. The mother let the child swim in the pool.

母親は子供 () プールで泳がせてあげました。

3. The father makes the child run every day.

父親は子供 () 毎日走らせます。

4. The mother made the child go to the cram school.

母親は子供 () 塾に行かせました。

5. The teacher makes the students do homework.

先生は学生 () 宿題をさせます。

II. 次の文は正しい文ですか。(そうでないならどこが間違っていますか。)

親は子供に買い物に行かせた。

() 正しいです。

() 間違っています。

理由：

III. 次の二文はどのような意味の違いがあると思いますか。

A. 親は子供を座らせました。

B. 親は子供に座らせました。